

アムスルだより

No.16 1995年11月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875

アムスルとは、阿嘉島臨海研究所のニックネームです



マガキガイの採集

アムスルでは、研究所のスタッフだけでなく、外来の研究者と協力したり、サンプルを提供したりしてサンゴ礁生物に関する研究を進めています。

先月、ある研究者からの依頼で、サンプルとなる貝を採集することになったのですが、種類によってはなかなか集まらず、ダイブショップの方々の協力で、ようやく集めることが出来ました。どうもありがとうございました。そこで今回は、この集めるのに苦労した貝の仲間についてお話ししましょう。

今回探していたのは、マガキガイ、スイジガイ、クモガイ、サソリガイ、ラクダガイなどで、これらはすべてスイショウガイ科(ソデボラ科)に属する巻貝です。このスイショウガイ科の貝たちは、三日月形で先端のとがった蓋をもっており、これを砂底などにさおのように差して、はねるように移動します。眼は長い柄の先にあり、美しい黄色いリング模様で囲まれています。この眼を伸ばして辺りを警戒しているのですが、採集しようとひっくり返す

と、殻孔からちょこっと出ているこの愛嬌のある眼と目が合い、少し胸を突かれる感じがします。

これらのうち、沖縄ではテラジャーと呼ばれてよく食べられるマガキガイは、ほかの4種と異なり殻に長い突起がなく、一見するとイモガイに似ています。沖縄での産卵の盛期は1~3月頃で、イノーの砂のたまった場所に数個体ずつ連なって、交尾をするのが観察されます。卵塊は、一見すると不規則な形の砂のかたまりですが、顕微鏡で見ると砂粒に混じって多数の卵が見られます。マガキガイは、以前はマエノハマでもたくさん見られたそうなのですが、先日潜ってみると食べた後に捨てられたと思われる貝殻ばかりで、生きている個体はほとんど見られませんでした。けれどもクシバルには、場所によって多くのマガキガイが生息しており、79個体を採集することができました。最も大きな個体は殻高63mm、最小個体は殻高34mmで、これより小さなものは見つけれませんでした。これは、成熟した大きな個体は繁殖のために浅い砂底に集まるため見つけやすく、未成熟の個体は岩場のくぼみの小石のたまったところなどに生息しており見つけにくいためではないかと思わ

れます。

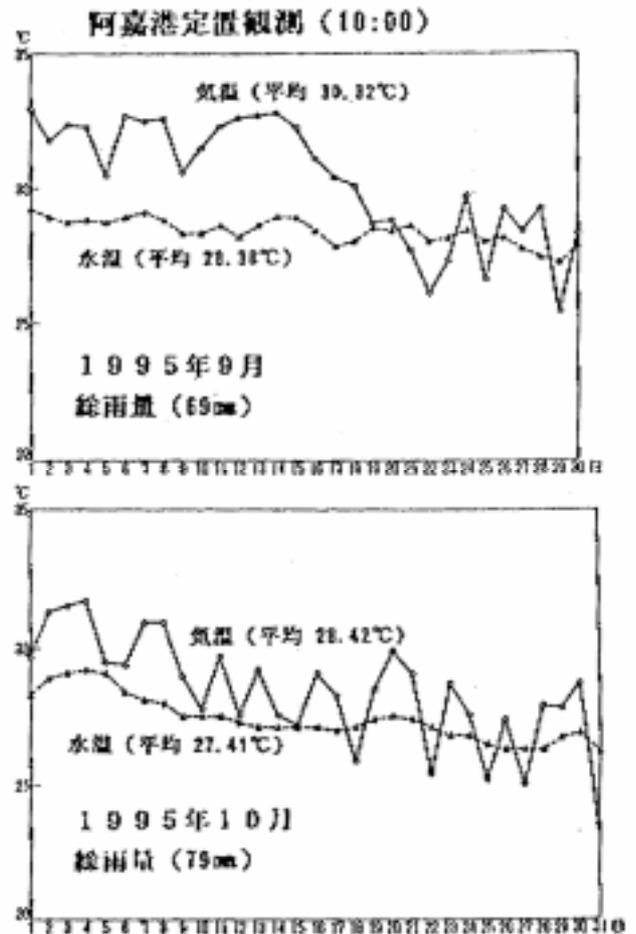
マガキガイに較べると、クモガイはぐっと数が少なく、スイジガイ・サソリガイなどはさらに少なくなります。これらの貝はマガキガイより大型で、殻には非常に目立つ突起があり、独特の形をしています。それぞれの貝の名前は、この貝殻の形に由来しており、スイジガイは水の字の形から、サソリガイはサソリに似た形からきています。サソリガイはついに1個体も見つけられなかったのですが、熱帯域には多いとされる種類で、おそらく阿嘉島の周辺にも生息しているだろうと思われます。皆さんが、もしこのサソリガイなどのように珍しい生物を見つけたら、ぜひ私たちにも教えてください。

阿嘉島の海より

-ケラマジカ調査-

陸上の動物たちも時には海を渡り、生息場所を広げることがあります。阿嘉島にすむケラマジカも、今から350年ほど前に、薩摩から連れ帰り久場島に放したシカが海を泳いで渡り、生息域を広げたものだと考えられています。

阿嘉島では、3年前から琉大の研究グループによるケラマジカの生態調査が続けられています。これまでの調査の結果、ちょうど今の時期、10~12月がシカたちの繁殖期であること、主にマサキやシマグワなどの葉を餌にしていること、20年前には30頭以下であった阿嘉島のシカは、現在4倍以上の100頭余りに増加していることなどがわかってきました。しかし、毎年抜け落ちるはずの角がどうしてなかなか見つか



らないのか、1日にどのくらいの範囲を移動するのか、1年を通じて同じ場所で生活しているのかなど、まだまだその生態についてはわからないことが多いのです。本州などにすむニホンジカは、本来森林にすんでいた動物で、それが草原にすむようになり、体や生活を変化させてきたと考えられています。その変化を推測する意味からも、ニホンジカの亜種であり始原的な生活場所である森林にすむケラマジカの研究は、非常に興味深いものといえるでしょう。琉大ケラマジカ研究グループの調査の発展を祈ります。